ドクター井口のつぶやき その43

「今日のお昼はどこにしましょうか？」

井口昭久

K教授は夏になると食欲がなくなった。食欲不振の原因は恐らく二日酔いのためであろうと医局員は想像していたが、先生は生涯に一度も酒をやめたことがなかったので推測の域を出なかった。

食欲のない先生にとって昼食をどこで食べるかは大きな問題であった。大学の病院内も周辺の食べ物屋でも先生の口に合う料理を出す食堂はなかった。唯一見つけたのが、とんかつ屋であった。そこの軟らかい豚カツの数切れは食べることができた。

先生は毎日そこへ通った。私も誘われて一緒に行った。少し太り気味の秘書も同席した。

店長は教授の席にきて挨拶をした。私がまだ若くて国立大学病院の医局員だった頃である。ある日先生がいつものように豚カツを注文したが、出てこなかった。後から来た客には出てきたが私たちには届かなかった。

イライラした先生は店員を呼んで催促した。店員は無愛想に返事をして戻って行った。それから数10分経っても注文したとんかつは届かなかった。その日、店長は不在であった。

二日酔いや教授会で疲れていた先生は気が短くなっていた。傍にいた私は先生の堪忍袋の緒が切れなければいいがと心配していたが、ついに先生は切れた。

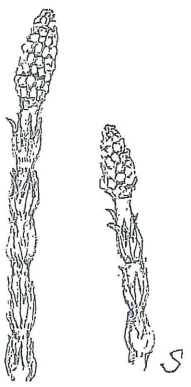
「こんな店！二度と来ん！」と捨て台詞を残して席を蹴って店を出た。私も秘書も慌てて従った。

先生の予測では、怒られた店員は天下の大教授を怒らせてしまって、困り果てている筈であった。そしてそのことが店長の耳に入り、店長は一升瓶を提げて教授室へ謝りに来ると思っていた。

しかしその時の店員はアルバイトであり、客が教授であることを知らなかった。その事件は店員の胸の内にしまわれてしまって店長には伝わらなかった。

教授は困ったが豚カツ屋は困らなかった。しかし毎日来ていた教授がぴったり来なくなったので、店長は不思議に思った。アルバイトの店員に尋ねると、「それらしき人が、店長に俺は二度来ないと伝えておけ」と怒鳴って出て行ったことを知った。

店長は「私はよいが先生はさぞお困りだろう」と思った。



教授は昼飯を食べるところがなくて困り果てていた。

事情を知った店長は一升瓶を提げて教授室へ謝りに行った。「とんだものを出してしまい申し訳ありませんでした」と言った。「注文と違った料理が出てきて怒った」と店長には伝わっていた。「何も出てこなかったので怒った」のが真相であったが、先生はそこは追及しなかった。「分かった、お前がそうまでいうのなら明日から行ってやる」ということになってまた豚カツ屋へ行くことになった。秘書はますます太った。

（愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授）